

最初のグループ発表の班の方針は、共通テーマは設けないで個人が自分の興味のある大名を選び、それについて調べるものであった。それで私が取り上げた大名は島津綱貴であった。なぜこの大名を選んだのかというと、江戸後期に台頭してきた島津家はこの当時どうだったのか、どういふ評価を受けているのかということに興味があったからである。謳歌評説の評価は「文武に志、義理を正し、下民を哀憐あること、主将の専守所にして畢竟忠節の志深と云べし」というもので高い評価を受けていたことが分かった。本文には藩の支配体系、国の情勢、家臣の性質が簡潔にまとめられている。地方知行制をいまだに行っていることや家臣の特殊な性質は薩摩藩の特性を示すものである。薩摩は日本の最南端に位置していて、領国は他の国と隔絶していて、外城制のもとで嚴重に閩津制度をとっていた。その一方で、道之島・琉球諸島を擁し、南方に門戸が開いていた。外城制や南西諸島との密貿易を中心にして藩社会は支えられていた。これらは特に南西諸島との密貿易は後の発展に大きな役割を果たした。旧来の構造は様々な面で残されていて、集落・村落には在郷家臣が多数存在していた。元禄の綱貴の時代では、鶴丸城の焼失、東叡山寛永寺の手伝普請、江戸藩邸の焼失で出費が多くなり財政難であった。綱貴は大名の資質は評価を受けている。一方で、大きな政治的な業績は特になかったようだ。『土芥寇讎記』では政治的な業績の評価はあまり重視していない。評価しているものは大名の資質であった。綱貴の時代はまだ幕府への影響力はあまりなかったように思われる。薩摩藩の台頭の大きな要因となったのは、島津重豪の開化政策や天保改革の成功である。したがって、薩摩藩をより詳細に分析するのであれば、それらの時代を採りあげる必要があるし、そこに行き着くように思われる。

二回目の発表では、班の統一テーマを決め、それを基にして個人

が作業をする方針だった。そこで何をテーマにするのかを班で話し合った。良将よりも悪将のほうが何によってそのような評価を受けるのかという点で興味深いのではないかと、という悪将の判断基準を詳しく調べてみることや「謳歌評説」に出てくる文書によって編者の人物像に近づけるのではないかとというテーマが出された。その結果「謳歌評説」に使われている文書の名前と人物の名前を各自の分担箇所の範囲でまとめることが共通作業となった。私は一二巻から二巻を担当した。その結果明らかになったのは、中国の古書や和書、故事が使われていることであった。これらは批判や戒めをするために使われているように思われる。金井氏も「批判のほうはしかし和漢の故事や儒教の価値体系に依存した観念的な記述が多い」と述べている。このように書物は編者の批評の判断基準に大きな影響を与えているのではないだろうか。人物は例えば男色で家を滅ぼした例では今川氏真が使われていたり、武に傾きすぎて家を滅ぼした例では武田勝頼が使われているなど、書物と同様に判断基準として使われている例が多い。そのような批判される人物とは対照的に、武田信玄や源義経が良将として使われているのも特徴である。これらの人物の評価というものは一般性というものはどれぐらいあったのだろうか。義経や勝頼の評価というものは人それぞれによって違うものがあると思われるのだが、人物の評価というのは時代や人が大きく影響するものであるから、それらを調べることはそのように評価する人の思想に繋がるのではないだろうか。人物像は金井氏が推測しているような幕府当局ないし將軍家に密着した一定階層の現職または退職後の高官であるということには間違いないと思われる。これだけの批評を行える立場にある人物はそれほど多くはいなかったであろう。文を重んじ大名の評価を行ったり、漢籍、和書に精通したりしていることは人物の性格を表すものではないだろうか。

『土芥寇讎記』の大名評価は、編者の価値基準が大きく影響しているためそのような見方があるのかというように受け止め方がよいのかもしれない。なぜなら評価基準は大名としての資質であって大

名の実際の業績をあまり評価していないようだからである。大名の総合的な評価ということはできない。

評価そのものよりも評価の基準となっているものが他の類書には見られないために重要であるし、さまざまな視点から分析できるところを授業の発表を通して感じた。院生の発表の内容や取り組み方には熱意があったので勉強不足だった自分が恥ずかしくなった。もつと自分の専門分野を含めがんばらなければとよい意味で刺激になった授業であった。